

左官材料に 魅せられて

バナキュラーデザイン

日本大学生産工学部建築工学科

教授 永井 香織

1. はじめに

建物の見学時にどんなところに着目して見ているだろうか。建物の形状やデザイン、間取り、材料の種類や納まり、色彩など、人によって見る視点が異なる。自分を振り返ると、学生時代には、大学の海外視察旅行に参加した時には、階段と天窓に興味を持ち、20か国で50以上の建物の写真を撮り纏めた記憶がある。心理学的に、人がどう感じるのかを知りたかったためである。企業に就職をしてからは、専ら仕上材料の種類や施工方法、劣化に興味を持ち、大学では、材料の種類や施工、劣化に色彩と材料の成り立ちも気になっているところである。

本稿では、近年話題になっているバナキュラーデザインにおける左官材料の役割について考えてみたい。

2. バナキュラーデザインとは

バナキュラーとは、ラテン語で「国内の、土着の、その土地固有の」を意味するVernaculus(ヴェルナキュルス)に由来する。バナキュラーデザインとは、表1に示す特徴を含む地域に根差した建築デザインを指す。古くから各地域で行われていた建築様式などを指し、特段新しい話ではないが、近年の課題で

表1 バナキュラーデザインの特徴¹⁾

特徴	概要
地域素材の活用	竹、土、石、藁、木材などその土地で入手しやすい材料
気候適応	高床式、深い軒、自然喚起、断熱・蓄熱など
生活文化の反映	縁側、土間共同空間など地域の暮らし方に根差す
技術の継承	口伝・暗黙知として伝わる工法が多い
持続可能性	低環境負荷、修繕しやすい、地域経済に寄与

ある環境問題やサステナブルに繋がり、日本でも再注目されている。バナキュラーの考え方は、地域産材の活用であり。天然材料がその基本となっている。左官材料はまさにバナキュラーマテリアルの代表格の一つといえる。

3. 日本の左官材料の特徴

3.1 日本と海外の比較

日本は、地域により環境も異なるため、それぞれの材料があり、使い方も発展してきた。日本の左官は地域差があるが、フランスとの比較を表2に示す。日本の左官材料は多岐にわたり、特徴も異なることや、仕上げとして用いることが多い。一方、フランスは土建築が基本となっており、構造材としても用いられるため、材料の厚みが異なり、材料の特性を有効に利用している。いずれの材料も地域産材として、サステナブル材として、CO₂削減に効果的で

表2 日本とフランス²⁾の左官技術の比較

	日本	フランス
材料	土、石灰、藁、砂、貝灰、にがり、麻スサ、	土、石灰、セメント、ポルトランド
施工	・漆喰、土、珪藻土、 聚楽など左官仕上げ ・専門の左官職人	・土系材料 ・地域の職人と住民
材料性能	・調湿性がある ・蓄熱性は壁厚による ・耐水性は漆喰が有効	・調湿性が高い ・蓄熱性は厚い土壁の 為高い ・耐水性は仕上げにより 確保
環境性能	・製造CO ₂ は、土壁が 低く、漆喰は中程度 ・LCA総合は、低酸 素建材	・製造CO ₂ は、非常に 低い ・LCA総合は、低酸 素建材
メンテナンス	・漆喰の塗替え、土壁 の補修	・再塗布

あることがわかる。

3.2 既調合漆喰の特徴

近年の左官材料は改良・開発されているが、例えば漆喰などは、伝統材料としての本漆喰だけではなく、施工のしやすさで改良された既調合漆喰が現在では多く用いられている。

既調合漆喰には、従来の天然麻スサ、藁スサだけではなく、植物系の繊維、鉱物系の繊維、化学系の繊維など様々な種類の代替品が使われている。これらは、もともとのスサの役割である粘りや割れ防止を補っている。さらに、増粘剤や樹脂、バインダーなども用いて、品質の安定性を向上する役割を有している。

図1は、スサの種類異なる既調合漆喰20種類と本漆喰の保水率を測定した結果である。本実験では、本漆喰の保水率が30%程度であるのに対し、いずれも保水率は30~90%までと保水率が向上している。これらの材料を同一面積とし、施工時間を測定したところ、材料の種類によるばらつきはあるものの、保水率が高いと施工がスムーズに行え、作業性が向上する傾向を示すことがわかった。これは、既調合漆喰の目的である、現場ですぐに施工できることや、施工性向上が十分に活かされていることを示している。

既調合漆喰は、パナキュラーデザインとなる地域産材としての役割はもちろんのこと、フランスの施工の考え方である地域の職人や住民たちが自分達で施工するには、有効な材料といえる。

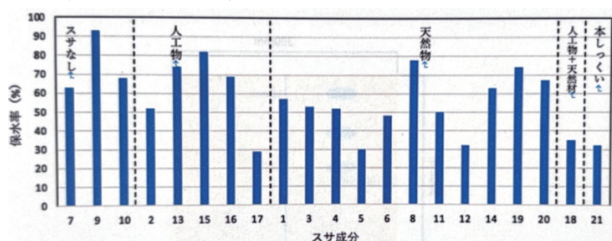


図1 既調合漆喰の保水率

4. 自慢できる建物を目指して

先日、左官材料が使用されている建物での会食があり、いつものように建物を観察していたら、支配人やおかみが建物の解説をしてくれた。写真1、2に示す建物は2026年3月で解体予定の建物である。オーナーのこだわりにより、建物は和風で、左官材料も随所に使用されている。話の中では、写真1の

外壁を指し、「この壁は全て本漆喰です。20年間一度も補修改修はしていませんが、きれいなままです」という説明であった。その時のおかみは、まさに自慢の顔であった。

さらに写真2のところでも、土壁や色の異なる左官材料をつかっていることも紹介いただいた。この建物では、色もの、漆喰、土壁、聚楽壁も使われており、色々な左官材料を見ることができた。



写真1 本しっくいの外壁 写真2 土壁の内壁と本漆喰

また、違うレストランでは内装に土壁が用いられており、照明により内装が独特なデザインとなっている個室があった。おかみに内装デザインの話をしたところ、帰り際に設計者が挨拶にきた。初めて土壁に照明でデザインを浮か立させているのに気づいてくれた、と感謝された。

今回は、2つの例を紹介したが、実は左官にまつわるこのような話は、日本だけではない。いずれの共通点も、「本物の左官材料を使っていること」に誇りを持ち、自慢しているのである。そんな姿を見て、いつも温かい気持ちになっている。

5. まとめ

今回までの連載を通して、日頃感じている「左官の魅力」について、出来事を通じて紹介してきた。止めることのできない人口減少の中、ロボット化や効率化が進んでいる。私自身も施工効率の研究も進めている。しかしながら、日本の保有する貴重な資源を改めて見直し、左官の特徴を活かし使い方を模索するのも楽しいと感じている。自慢の顔をして語ることができる伝統材料の維持と新しい使い方を育てていきたいと考えている。

【参考文献】

- 1) Oliver, Paul (Ed.), Encyclopedia of Vernacular Architecture of the World. Cambridge University Press, 1997.
- 2) Hugo Houben, Hubert Guillaud, Earth Construction, Intermediate Technology Publications